

面積比別の配色の基本

1. 配色の面積比

面積比から配色をとらえると、基調色、準基調色、アクセント色の3種に分類されます。

- ①色彩を景観として調和させるためには、基調色の設定が大切です。
- ②配色のこころよさを高めるには、準基調色が基調色に調和していなければなりません。
- ③景観を生き生きさせるためには、アクセント色を効果的に使うことも必要です。

①基調色の選定－全体のイメージを左右するベース色です

基調色とは、文字どおり対象物の外観の中心となる色のことです。建物であれば外壁や屋根、路面であれば舗装材の色、橋りようであれば本体のベースにどんな色を付けるかで全体の印象が決まります。検討時の留意点としては、P.9で述べたような周辺環境との対比感に注意し、近隣に好ましい景観を形成している色彩の建築物や人工物がある場合には、それらとのつながりに注意しながら、ベースとなる色調を検討します。



群としての屋根色が景観の基調色となっています。



基調色のブラウンを生かして、全体がまとめられています。

②準基調色(サブカラー)－配色の質を高めるために用います

準基調色とは、基調色に対して用いるサブカラーのことで、用いる面積は基調色に対して少ない面積になります。建築の外装ばかりではなく、タイルやブロック、石材などを使った舗道材などにおいて、路面を単色にすると表情の乏しいものとなるためデザインパターンを配色することが行なわれます。こうした場合に基調色と近い色相でトーンに変化をつけると、デリケートでリズム感のある好ましい配色の効果を得られます。



部材やサインなど全体にトーンの効果が生かされています。



トーン効果でリズム感が生まれ、単調さが回避されています。

③アクセント色の活用—シンボル効果やにぎわいを与えます

アクセント色とは小面積に用いる強調色のことです。使用の目的は大きく2つあります。ひとつは、シンボルカラーをサイン的に用いるケースで、識別的な目的があります。もうひとつは、外観ににぎわいやリズムを与え、デザイン上のバランスをとるための装飾的手法として用いられるケースです。いずれの場合にも色数を増やしすぎないこと、面積を広げすぎないことが重要です。特に自然環境を保全すべき地域では、アクセントカラーの使用に注意が必要です。



観覧車の色が景観に楽しさを与えています。



アクセントカラーを使い圧迫感を回避しています。

2.面積別の色の選定方法



事例



①基調色の選定

周囲の環境やエリアカラーを考慮し、選定します。有彩色では色相とトーン、無彩色では明度に注意ながら基調色となる色を選びます。(一般的に、はでなトーン、極端に明るいトーン、暗いトーンは基調色には向きません。)

②準基調色の選定

基調色に近い色相で、トーンに差のある色を選びます。差がわずかであれば繊細な感じ、差が大きければシャープな感じが得られます。準基調色は補助色として2色～3色必要な時もあります。

③アクセント色の選定

トーン差のある色がアクセントになります。色相は基調色に近い場合もあれば、離れている場合もあります。

■色相とトーンスケールでの関係

		色相のちがい									無彩色	
		R	YR	Y	GY	G	BG	B	PB	P		RP
トーンのちがい	はで	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
	明るい	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	じみ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	くらい	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

注: 色相のちがいの行では、YR, Y, GY, G, BG, B, PB, P, RP の色相はそれぞれ異なる色相のグループとして示されています。また、YR, Y, GY, G, BG, B, PB, P, RP の色相はそれぞれ異なる色相のグループとして示されています。また、YR, Y, GY, G, BG, B, PB, P, RP の色相はそれぞれ異なる色相のグループとして示されています。

(P.5の色相とトーンスケールを簡略化して表示しています)

色彩計画の視点と事例

色彩計画時のポイントと調和の考え方

環境的要件や地域性

自然環境色

植生
土、砂、岩
海、湖沼、
四季の変化など

エリアカラー

各地域ごとに見られる固有の色使い
歴史的町並や伝統建築の色など

地域のイメージ

住民が大切にしたい景観やふさわしいと思うイメージなど

色を使うための知識や技法

色相とトーン

色の表示・伝達の方法

色の選び方

背景との対比感

配色の方法

面積比別の配色
配色テクニック

①主に自然環境との調和をはかる

- 近景、中景だけではなく、遠景からの明るさの見え方や、反射性にも注意します。環境に対して同化、類似化の対比が原則です。
- 周囲の植生や土、砂、岩などの色彩、季節ごとの色彩の変化も計画に入れ、四季を通じて周囲に調和する色を検討しましょう。
- 同じエリアにある別の建物や施設の色・素材感が、周囲になじんでいるかどうかチェックしてみましょう。木質仕上などにおいて彩度の高い塗装により質感を損なわないよう注意します。

②自然が豊富な環境で、町並や人工物どうしの調和をはかる

- 自然環境に対しては①の考え方が基本になりますが、町並としての連続性やまとまりに注意することが必要です。
- 計画地域のエリアカラーに注意します。
 - ・周囲にある歴史的町並や建造物の色
 - ・地元集落や古くからある市街地に見られる色
 - ・地元の推薦色や交通機関やサインなどに特徴的に使われている色

③市街地で、町並や人工物どうしの調和をはかる

- 計画地域のエリアカラーに注意します。②の項と同様の考え方が基本になります。
- 景観としてのまとまりや、連続性、リズムが必要です。周囲から突出した色、つながりを壊す色を控えることが必要です。
- 植栽計画がある場合、背景との関係を配慮し、葉や花、幹が美しく映える色を検討します。
- アクセントカラーも効果的に活用することができます。

※色相とトーンの見方はP.4・5参照

■ 良好な事例と解説



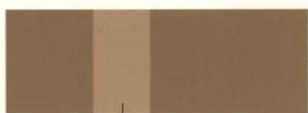
自然景観に溶け込む色相とトーンを使っています。



背景 建物 前景
GY/DI N5 N9 YR/Lgr R/Dk GY/L



経年変化に耐えやすい色相とトーンを使用しています。



背景 橋りょう 背景
Y/Lgr YR/Gr YR/Lgr



木質の素材感を生かした色相の仕上げです。



背景 建物 背景
GY/Gr YR/DI GY/Gr



屋根色を統一することにより、集落のまとまりが形成されています。



背景 建物 前景
GY/Dgr R/DI YR/Lgr GY/DI



壁や屋根の色を統一することにより、群のまとまりが形成されています。



背景 建物 背景
Y/DI N4 YR/DI N9 Y/DI



サインの色とガードレールの色との調和がはかられています。



背景 サイン ガードレール 背景
GY/L N8.5 YR/Dgr YR/Lgr R/Dgr GY/L



フェンスと歩道が同一色相で整えられています。



フェンス 歩道
YR/Dgr YR/Lgr



橋りょうの高欄の色を背景の建築物に合わせ、調和をはかっています。



建物 高欄
YR/Dk YR/Dgr



歩道においてトーン効果に注意し、モニュメントや植栽が映える色を使っています。



歩道 植栽モニュメント
N7 N6 N5 GY/DI B/L

ケースに応じた色の使い方

景観タイプとケースについて

たとえば、橋の色を決める場合に、都市部と山間部では考慮すべき条件が異なります。また、互いに離れた地域でも景観の構成条件が似ていれば、環境色に類似性があります。このような景観の色彩を構成する条件に合った色の使い方が望ましい色彩環境を実現する基本となります。

本ガイドプランでは、景観色の類似性に基づき県内の景観をタイプ分類し、色彩計画の要件ごとに以下3つのケースに分けて望ましい色の使い方を提案しています。

1. 主に自然環境との調和をはかるケース
2. 自然が豊富な環境で、町並や人工物どうしとの調和をはかるケース
3. 市街地で、町並や人工物どうしとの調和をはかるケース

■景観タイプの説明

色彩の要件と景観タイプ	特 徴	代表的視点場
計画地に自然的要素が強い ↑ ↓ 計画地に人工的要素が強い	【山岳景観】 山岳や山間に見られる景観です。植生の色や遠方の山並の色、土や岩の色が中心となります。	奥羽山脈に属する山岳、津軽山地、白神山地、恐山山地の山岳、岩木山などの幹線道路や山道、林道沿い
	【海岸景観】 大規模な港湾施設を備えていない海岸線の景観を指します。砂丘や岬、干潟、小規模な漁港も含まれます。	海岸線の国道や鉄道沿い
	【高原・台地景観】 緩やかな起伏をもった放牧地や草地の景観です。土や草の色を背景に人工物が点在する景観となります。	三本木原一帯、八戸南部、東北町一帯、横浜町陸奥湾沿い一帯、岩木山北部の長平高原などの幹線道路、農道沿いなど
	【山麓景観】 山すその農村や果樹園など山の斜面が背景となる場合が多い景観です。青森県では岩木山麓のリンゴ畑の景観が典型といえます。	山麓一帯の道路沿いなど
	【河川湖沼景観】 比較的広い河川敷をもった川と湖沼の景観を指します。(山間を流れる渓流や湖は山岳景観になります。)	岩木川流域、赤石川流域、相坂川流域などの橋の上や道路沿い、十和田湖、小川原湖、十三湖などの湖畔
	【田園農村景観】 比較的平坦な田畑の中に農村集落が点在する景観。土や作物の色、背景の森や山並、集落の外装などの色彩から形成されます。	県内平野部の幹線道路や農道、鉄道沿いなど
	【市街地景観】 商業地域やオフィス地域、住宅地など人口の集中する地域の景観です。住宅地区ではおちつきが、オフィス地区ではまとまりが、商業地区ではにぎわいが重視されます。	県内市街地一帯の道路、鉄道沿いなど
	【産業施設景観】 大規模な漁港や港湾施設、工場、コンビナートなど。工業や水産業が発達した地域の景観です。	八戸港や青森港、大湊港の一帯の道路沿いなど

1.主に自然環境との調和をはかるケース

山岳景観や海岸景観など、計画地周囲に人工物が少なく自然性が高い景観の場合は、どのような点に気をつければよいでしょうか。

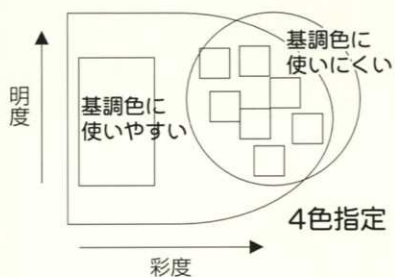
色使いのポイント

- 四季を通じた植生の色の变化や、山肌や土、岩肌、砂などの色、積雪時の景観の色彩の変化も視野に入れましょう。
- 近隣に建物や施設があれば、その色や素材感が環境になじんでいるかどうか、チェックしてみましょう。色使いのヒントが見つかるかもしれません。
- 自然景観はスケールが大きいので、近景、中景だけではなく、遠景の視点場からの眺望にも注意してください。

注意を要する色の使い方（事例は説明のため実際の色を変えて作成したものです）

基調色に高彩度の色や自然色から離れた色相にしないこと。

- ・特に明度の高い明るい色では、彩度が6を超えると、色みが強く感じられます。
- ・その傾向は、P系（紫系）やRP系（赤紫系）など、自然にあまり存在しない色相ほど強く感じる傾向があります。



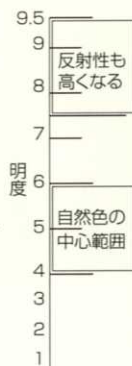
赤茶系の屋根も、彩度を上げすぎると、どぎつくなります。



自然環境色から離れた色相は違和感を与えやすい点に注意してください。

明度の高い色を大面積に使用しないこと。

- ・積雪時を除くと、自然環境の基調色は明度4～6の範囲に集中しています。
- ・明るすぎる色は周囲から浮いて見えるだけでなく光の反射性も高いため晴天時の日中に特に目立ちます。
- ※面積効果で、無彩色の場合、明度7.5～8.0程度でも「白」と認識されます。



周囲の環境色に対して、外壁のみが突出しています。



外壁の木の質感がひきたちません。

2. 自然が豊富な環境で、町並や人工物どうしとの調和をはかるケース

計画地の周囲の自然性は高いが、すでに建造物等がいくつも建っているような景観ではどのような点に気をつければよいでしょうか。

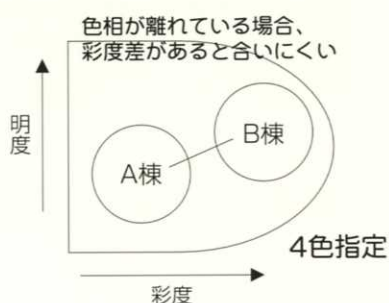
色使いのポイント

- 自然環境に近い色であり、かつ現地の建造物と調和する色彩がもっとも適しています。
- 近隣の建物や施設の色が良好な景観を形成しているかどうかチェックし、相互の色彩のつながりやリズム感に注意します。
- 周囲の植生や緑地の色彩変化、土や山肌や岩肌の色、積雪時の色彩の変化も念頭に置いてください。

注意を要する色の使い方（事例は説明のため実際の色を変えて作成したものです）

自然環境と建築物相互のまとまりに注意をはらってください。

・建築物相互の基調色に色相差や彩度差が大きい場合、バランスのとれたコーディネートがむずかしくなります。特に色相を多く使う時はトーンを合わせるのがコツです。



2棟の間に色相差があるため、まとまった感じがしません。



1棟の屋根が集落の景観を損なっています。

計画地のエリアカラーを重視してください。

・塗装の色やタイルなどは、比較的カラーバリエーションが豊富ですが、目新しさのみで選ばず、計画地域の伝統色やエリアカラーを大切にしてください。



橋りょうにおいて、集落の色が考慮されていないため、地域らしさが感じられません。



周辺建築との色の関連がなく、外壁のみが突出して見えます。

3. 市街地で、町並や人工物どうしとの調和をはかるケース

計画地の周辺がすでに開発が進んだ市街となっており、町並や都市景観としての調和を重視する場合はどうでしょうか。

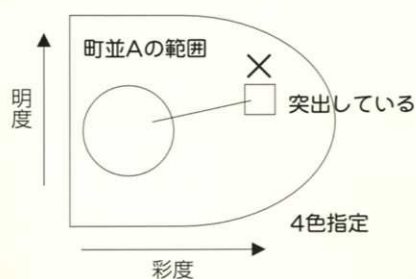
色使いのポイント

- 市街地では、商業地区、オフィス地区、住宅地区、歴史的町並、公園といった、エリアごとのイメージプランニングが重要です。
- 商業地区は雑然とした景観になりやすいエリアです。町並としての連続性やリズムに注意し、周辺の建造物とのまとまりを保つ色彩を優先させます。
- 地域の建物や周辺地区に、伝統的に使われている色や統一感のある色使いがあるかをチェックします。
- アクセントカラーを使用する場合は、目立ちすぎないように、大きさと彩度に注意をはらいます。
- 産業施設においては、外観の圧迫感をやわらげ、景観に溶け込む色を優先させます。

注意を要する色の使い方（事例は説明のため実際の色を変えて作成したものです）

町並や施設群の秩序感をこわす色の使い方を控えます。

- ・周辺施設のトーンのまとまりを配慮し、全体からみて近い明度、彩度を優先させます。
- ・基調色に彩度6以上は要注意です。



フェンスの色のみが突出しています。



1棟が全体の中で浮いています。

幹線道路沿いや住宅地では不快感を与えない色を配慮して下さい。

- ・色相によって、彩度がそれほど高くなくても、多くの方が不快感をもよおす色相があります。P系（紫系）、RP系（赤紫系）などは、基調色に使うと、げげげしい印象になりがちです。
- ・また、住宅地では、ベージュやアイボリーなどの基本色を重視した色使いが大切です。



周囲に不快感を与えやすい色相と彩度です。



住宅街としてのまとまりやおちつきが感じられません。

景観色彩に配慮した設計の手順

以下に、景観色彩に配慮した設計の実施手順を示しています。

基本設計時

計画地の色彩チェックとイメージプランニング

景観設計上の基本検討要件

- ①建築物等の位置、規模、形態など
- ②外観の意匠、仕上材

1.情報収集

県内を12の景域に区分し、景域別の特性や配慮事項を示した「地域別景観特性ガイドプラン」を参考とするとともに、計画地周辺の情報を市町村の景観窓口に問い合わせ、景観形成基本方針等、配慮すべき情報の収集を行って下さい。

2.地域の環境特性の把握

計画地の周辺道路や視点場から環境色や町並の色などをチェックし、好ましい色の条件をあらい出します。視点場からの写真等を使いラフなデザインイメージを描きます。

3.イメージ・プランニング

計画物の外観のイメージの方向をまとめ、デザインコンセプト(方針や考え方)をまとめます。色彩が周辺環境に与える影響を考え、計画物の用途や性格にマッチした外観イメージを企画します。

実施設計時

4.仕上げ材別の検討

仕上げの材料ごとに、適した色の範囲や種類があります。計画したデザインコンセプトにふさわしい材料かどうか、既製品色のなかにふさわしい色があるか、特注色が必要か、仕上げ材の見本帳やサンプルを調べておきます。
※色の退色性やメンテナンス(維持管理)にも注意が必要です。

5.色彩の検討

選定した材料別に基調色と必要に応じて準基調色、アクセント色を選定します。ケースに応じて数案作成するとよいでしょう。
推奨色範囲…P.19~P.23
地域別のデータと色彩選定の考え方…P.24~P.31
などを参考にしてください。

6.景観シミュレーション

パース、立面図、CGなどで、計画地に建築物等の画像を描き、着色してみます。周囲の景観タイプや地域性にマッチしているかどうかを検討します。
配色テクニック…P.36, 37
などを参考にしてください。

※色のチェックと指定方法

マンセル値表示の無い仕上げ材のサンプル帳や既製品の場合は、JISの標準色票と照らし合わせ、色相、明度、彩度を確認します。
塗装色の指定には、社団法人日本塗料工業会の色見本が広く使われています。
塗装以外の仕上げ材や特注色の選定・指定には各種の色見本帳や色票による指定が行われます。

景観形成基準の適合性の判定

- ・青森県大規模行為景観形成基準
及び青森県大規模行為景観形成基準ガイドプラン
- ・青森県公共事業景観形成基準
及び青森県公共事業景観形成基準ガイドプラン